

仙 石 貢 君 に 就 て

野 村 龍 太 郎

私は東京大學在學中仙石君と同じく寄宿舎にゐた。仙石君は明治十一年東京大學理學部土木學科の第一回卒業生（其時の土木學科卒業生は君と石黒五十二君、三田善太郎君の三人であつた）として學校を出られ、直に東京府土木課御用掛に就任せられたが、私も亦明治十四年同大學を卒業し、東京府土木課に就職した。其時には仙石君は既に鐵道局の方へ轉勤されてゐた。其後明治十九年に私が亦鐵道局に轉じ、東海道線の建設に從事することになつたが、仙石君は東北線の建設に從事されてゐたので、會合する機會も稀であつた。其後仙石君は甲武鐵道會社の新宿八王子間線路の委託工事を擔任されたが、間もなく歐米へ出張を命ぜられたので、私が其後任を命ぜられ、同線の工事を完成するに至つた。

仙石君が歐米より歸朝された後は全國鐵道線路調査并に運輸方面に努力された。其頃同君の考案されたる線路地形表及經濟表の様式は今日まで線路の優劣を定むる基準として重用されてゐる。

明治二十九年鐵道局を辭し筑豊鐵道會社の社長となり、次で九州鐵道會社の社長となられ、其後筑後鐵道其他を九州鐵道に合併し、

九州の私設鐵道を統一せられた。鐵道國有に際し會社を辭し、猪苗代水力電氣會社を創立して一大水力事業を起された。其後鐵道院總裁、鐵道大臣、又最後に満鐵總裁となられ、我邦の技術界に貢献されたる偉大なる功績は永く青史に傳ふべきである。

仙石君はあくまで技術家であつて決して政治家ではない。仙石君の讀書力と精力は餘りに強大であつたが爲に、稍もすれば技術家以上に鋒鎌を現はしたものであらう。豪放の中に綿密な處があつて、仕事に忠實であつたことは仙石君の技術家としての特性であつた。

特に仙石君の世人に知られない美德は、人情に厚い點であつた。唯面會すれば無口で無表情な人であつたが、先輩や友人や部下に對しては何處までも親切で面倒を見て世話をしたものである。

仙石君の剛強な性格の一面には、斯うした人情に厚い點があつたことは、世人の餘り知らない様であるが、土佐人として同郷の人は實に仙石君を、慈父の如く慕つてゐたのであつた。

今や此偉人を失つたことは洵に痛惜追慕の念に堪へざる所である。

仙 石 貢 博 士 に 就 て

古川阪次郎博士の追憶談

老年益々頑健である古川阪次郎博士は、僚友仙石貢氏を失つて暗然として故人を語られる、十一月七日帝國鐵道協會にて小卓を圍み乍ら。（一記者）

朝鮮の鐵道調査

日本鐵道會社の東北線建設工事が政府に委託され、私は大宮から栗橋間を擔當する事に

なり、増田禮作氏が主任で現場に出てゐた。それは明治十八年頃だつたと思ふ、恰度栗橋から先を仙石君が擔當してゐたので、其頃初めて仙石君の名を知つた。私は虎の門にあつた工部大學出身であるし、仙石君は東京大學出身であつたから、同じ工部省に居ても顔を